

急速に拡った孔子批判

中嶋 最初の楊栄国論文が、八月七日ですが、『人民日報』に出まして、当時はそんなに注目されなかったわけですが、あれよあれよという間に孔子批判のキャンペーンが次々にはられてきた。それらの批判は中国共産党の機関紙である『人民日報』、理論誌の『红旗』に出ているのですが、とくに今回はもと

もと民主諸党派の共同機関紙なのですが実際には中国共産党の主張が貫徹している『光明日報』を通じて、大々的なキャンペーンが起こっている。最近では中国の大衆レベルにおいても、あちこちに孔子批判のスローガンが掲げられて、人民公社などでも批判が行なわれている。つまりこの八月以来中国で起こっていることは、単に理論レベルの問題だけでなく、一つの新しい大衆運動という形に

なっているわけです。

しかもこれまでの中国の歴史を見てみますと、歴史上の人物に対する評価なり、再評価は、必ずと言っていいほど現実の党内闘争、ないしは政治闘争の反映であった。あるいは党内のさまざまな批判の潮流を封ずるための材料として使われてきたと思うんです。

そうしますと一体今回の批判は何を意味しているか。言うまでもなくこれらの孔子批判



● 対談

孔子批判・始皇帝擁護の謎



は、表向きはことごとく林彪批判と結びつけておこなわれている。しかし幾つか代表的な論文を読んでみますと、その中になんか含みのある。インブリケーションの多い表現があり、わが国の多くの新聞が例によってしきりに解説しているように、これはあくまでも林彪批判を深化するものである。つまり林彪風運動の一環だという形だけで受け取っていかどうか。そういう意味でこの運動がどう

いうふうに発展するかによつては、かなり大問題になるかもしれないと思います。

孔子批判を上まわる始皇帝擁護

柴田 明らかにこれは形式的には、林彪批判の運動の中で行なわれていることは確かかなですね。

しかしながらそれが実際に林彪批判だけに尽きるものかどうかという点、私もそうは思

わない。

これを考える上で重要な点をいくつかあげますと、まず第一に最初は孔子批判に集中されていた。ところが途中から秦の始皇帝擁護論が出てくる。しかもどうも孔子批判よりも、秦の始皇帝擁護論のほうが上回っているという傾向をぼくは感じるんですよ。これが一つ。

第二にいまのところ実際の経済や、外交政

ったというのだろうか。もしそれが本意であるなら、高校生並みの判断力である。

しかし根はもっと深い。『朝日』は「アジエンデ政権の失敗」という。けれども『朝日』の期待に沿えば、チリに成功のチャンスはなかった。成功がありうると思うところに「進歩的精神を持」する人々の政治的思考力の弱さがある。

さすがにこれだけではバツが悪いのだから、社説とは異なる論点を記事の中に密かに導入して、つじつま合せをしている。まるで手品である。

九月十四日に「チリ政変、やはり濃い米の影」とある。小見出しに「ふところ手政策成功、直接には手を下さぬが、経済をテコに締め上げ」と題するこのコラムは、「米国はチリで、直接には手を下さぬものの、いわばふところ手をしながら、好ましくない中南米の政権を揺さぶるという新たな戦略を成功させたようにみえる。米国の影はやはり濃いといえるだろう」と書いている。そして米国策動説の論拠として、IITとCIAの陰謀、チリ軍への援助、米艦艇の存在、アメリカの経済封鎖、を挙げている。

この新しい論点は『赤旗』が指摘する第一点と全く同じで、その根拠とする事例まで一致する。同時に自分の社説の評価とは異っている。

また九月二十九日には「クーデター半月のチリ」と題する特派員報告の中で、クーデターの原因を論じている。その中では中産階級と低所得階級の対立という新しい論点が紹介されている。「こうした貧しい国でその低所得層の生活水準を引上げるためには、ある程度中産階

級の犠牲を求めざるを得なかった」。しかし「インフレ、物質不足、政府財政の破たんは、それでもなおスラムから公営住宅に移り、自分の土地が与えられるようになった層より、中産階級にとって敵しいものと受け取られた」。

この論点はまた、『赤旗』九月十六日付、「チリ・クーデター、その示すもの(中)」と同一であり、社説の評価と関係ない。

私は本誌一月号で、『朝日』はクーデターが起きると軌道の修正をしたと書いた。「ところが気がついてみると、『朝日』自身はいちもやく国際世論に便乗して、冷徹な批判者になりすまして現われたのである」。(一五五頁)しかし問題はもっと悪質である。

確かに『朝日』の論調は『赤旗』を左の限界にし、クオリティバーであるニューヨークタイムズ、ロンドンタイムズ等を右の限界に、この間を揺れ動いている。そしてアジエンデ政権の出発に際しては、左サイド一杯から、つまり『赤旗』と二人三脚で礼讃し、クーデターが起ると右サイド一杯に軌道を移したが、それで終らなかった。本来オピニオンであるべき社説はクオリティバーに寄りかかっているが、報道の部分に「左の軌道」を残した。アメリカ真犯人説、中産階級蜂起説がそれである。

これでは『朝日』の本当の判断がどこにあるのか判らない。しかしそこがつけめなのかもしれない。

私はここで「朝日新聞綱領」の第四条を想い起す。「常に寛容の心を忘れず」とはこのことであつたのか。「品位と責任を重んじ、清新にして重厚の風をたつとぶ」。

私はこれ以上論ずる気持になれない。

策を批判するところへは、まだそう行っていない。学術、文学、芸術、教育、これを中国では文化領域と言いますけれども、ここにほぼ限定されている。これが次に重要だと思ふ。

第三に重要なのは、一九六九年秋以降の外交政策の転換から始まって、特に林彪失脚以後非常にはっきりと出てきた脱文革化の過程、これと密接な関連があるだろうということ。もっと具体的には

七二年の半ばごろから、林彪批判の性格が変わったことです。いまだに林彪を極右として攻撃していた論調が、今度は極左批判に変わったこと。この転換との関連が非常に重要なことです。それから第四には、もちろん十全大会と密接な関連がある。こういうふうにして押えていくと、まずこれが林彪失脚以後の特に顕著になってきた脱文革化過程に対するいわゆる文革派、急進派、左派の反発、巻き返しであることは、ほぼ間違いないと言っていると思うんですね。これから先はまたあとでいいです。



なか 嶋 嶺 雄

東京外国語大学助教授

中嶋 林彪失脚以降中国の中には、言わば林彪批判をもっと徹底化させようという、い



しば た 田 穂

サンケイ新聞外信部次長

ま中国で潮流と言っているものと、それに対する、つまり「批林整風」と脱文革に対する



批判とも思える反潮流とがあると思うんですね。「紅旗」あるいは『人民日報』に出る論文も、潮流と反潮流とどちらかに分けられるようなものが多いんですね。

それはまさに十全大会の周恩来報告自身、二つの路線の闘争が終わっていない、これからも十回、二十回、三十回と林彪事件みたいなことが起きるということを言っていることと照応する。

だからもしもいまの運動が顔面どおり林彪批判の深化にあるとするならば、なぜ打倒し尽くされた者を批判するためにあえてこういう形で再び大々的にキャンペーンを張らなければならぬのか。そう考えるとこれはどうも単に林彪批判ではなく、まさにまだまだ「現代中国の孔子」と目される人物が、存在している、これに対する批判だと考えられるわけですね。

そうしますと問題はだんだんはつきりしてくる。はたしてこれが周恩来を批判するものか。あるいはそれ以外のか。毛沢東を批判するものか。あるいはそれ以外のか。ある人物を批判するものかということ

すね。しかしそのへんの肝腎の議論は一寸あ
と回しにして、さっき柴田さんがおっしゃっ
た、始皇帝をなぜこれほど高く持ち上げるの
かということから少し議論してみたいと思っ
た。このほうがどうもわかりいいんじゃない
かという気がしますね。

中国で始皇帝が問題になったこと

新中国になってから少なくとも私の知って
いる限り、始皇帝が問題になったことは、こ
れまで四〇五回ぐらいあったと思うんです。

第一は一九六〇年代初期、もちろんいまのよ
うな形で全面的に始皇帝をたたえる運動はな
かったですけれども、少なくとも『歴史研究』
などに出ている論文では、従来の始皇帝像と
は違って、始皇帝の一定の進歩的役割とその
歴史的功績を、評価する論文がかなりあっ
た。

第二に、これも六〇年代前半、たしか六四
年だったと思いますけれども、毛沢東の詩が
中国で出版された。『毛主席詩詞』ですね。

その中に毛沢東が一九三六年につくった「泌
園春 雪」があるわけですよ。これはあまり
にも有名な詩でいろいろな解釈があるのです
が、要するに歴代の中国の英雄、豪傑をす

つと並べて、秦始皇も、漢の武帝も、唐の太
宗も、宋の太祖もそして蒙古帝国のジンギス
カンもみな非常にりっぱだったけれども、欠
けるところがある、ほんとの文武備わった「風
流の人物を数えるには、なお、今朝を見るべ
し」という詩です。いわば、その時代に輩出す
る真の英雄に自分をなぞらえているわけだ
が、このときに毛沢東は始皇帝についてまず
第一番目に触れている。ぼくは毛沢東は、か
なり前から始皇帝にシンパシーを持ってい
たんだと思うんですね。それが始皇帝が出て
きた二番目の時期ではないかと思えますね。

第三は文革の最中です。これは紅衛兵資料
の中にあるんですが、林彪と毛沢東が焚書坑
儒について論争している。林彪が焚書坑儒に
ついていろいろ言ったところ、毛沢東はあん
なものはまだまだ序の口でもっともっと革命
的に激しくやってもいいんだ、これからも
とやるんだということをいっている、ちよう
ど「造反有理」の紅衛兵運動、「四旧打破」、
「破旧立新」の運動が起っている時期だっ
たと思います。

最後に第四は、十全大会のときに周恩来が
明らかにした、林彪が書いたと言われる反革
命陰謀の書「五七一工程紀要」です。この中

で毛沢東を秦の始皇帝にたとえて、彼こそは
マルクス・レーニン主義の衣をかぶった専制
暴君であり、現代の秦の始皇帝になっている、
ということをやっていますね。これを林彪が
書いたかどうかについては、ぼくは非常に疑
問がある。

しかし、「五七一工程」紀要はだれが書い
たにせよ、林彪批判のテキストとして非常に
広範囲に流布されている。その中で毛沢東は
秦の始皇帝ではないかということばは、ある
意味で現在の中国の民衆にとっては、非常な
トゲのある、聞かせてはならないことばなん
です。つまりやっぱ何と言っても、毛沢
東の支配に対してはいろいろ問題があるわけ
ですから民衆にとってもピンとくるものがある。
そういう形で描かれた始皇帝像を全面的
に転換させる必要があった。そういうところ
から今回の始皇帝評価がでてきたような気が
しますね。

なぜ始皇帝をよみがえらせる 必要があるか

さてそれでは、なぜ現在始皇帝を再評価
し、よみがえらせる必要があるのかというこ
とですが、第一には、いまいった林彪事件と

じがするんです。というのはいまの文革派、急進派が受け持っているというか、握っている基盤は、それほど全面的ではない。特に國務院の経済政策や、対外政策を担当する行政府についての文革派の力は弱い。そうすると文革派の一番とりでは、江青、姚文元であり、それは文化部門に依拠している。そこに支持者もかなりいる。したがって彼らがいま反撃を開始しているのは、やはり比較的文化、教育部門に限定されるだろうと思います。それ以上に出る力があるかどうかというのはまだわからないけれども……。

この三つを確認した上でいよいよ本題にはまいりますと、やはり陳伯達が失脚し、林彪が失脚し、林彪批判がどんどん進められていけば、一番危機感を感じるのはだれかというところ、江青、姚文元だと思ふ。王洪文、張春橋が周恩来路線に歩み寄ったというわさは別にしても、ともかくみんなから一番うらまれ、そしてものすごい摘発をやった。ことに文化、芸術部門を徹底的に壊滅させて、いわゆる「江青劇団」と称するものを打ち出した、この江青と姚文元は、おそらく最も危機感を感じるであらうという想定ができるわけですね。

したがってこれに対して何とかそのほこ先が、自分たちの方向に向かないようにしなければならぬ。こう考えますね。それはちょうど林彪が毛沢東の影響力が低下してきて、自分の北京周辺には別の、非林彪系軍が配置転換されると、名目的には党副主席、No.2、後継者という地位をもつていても、自分の実権が明らかに弱まりつつあると感じた。その危機意識から彼は早く全国人民代表大会を開き、憲法を通し、その中で国家主席という国家権力部門の地位を取りたいと思った。そしてそういう危機感から、事実上反周恩来クーデターのものを企図したとばくは考えているわけです。それと同じ危機感が江青女史や、姚文元にひしひしと感じられてきた。

文革派の自己防衛的小運動

そこでまず林彪極左批判を極右批判にきりかえる努力をしたと思うんですね。したがって昨年の半ば、突如として林彪極左批判が、林彪は極右批判に変わっていった。これを変えなきゃならない人間はだれだったかというところ、江青であり、姚文元であつたらう。もし王洪文、張春橋が彼らのグループからはずれて、周恩来と手を結んだとすれば、なおさら彼らの危機感は非常に強まっている。

次に、七三年八月一日の解放軍記念日は非常に不可思議な日なんです。つまり、周恩来はだれか外国元首を連れて東北へ行ってしまう。そして江青と姚文元はこの時期相当長く出てこない。まさにこのときに十全大会の準備が進んでいただろうと思われるわけです。そして八月三日毛沢東の「偉大な中国人民の指導者」という「偉大な」がとりはずされた。

孔子批判が打ち出されたのはこの四日後です。そうすると「偉大な」を取った人と、孔子批判を持ち出した人はやはり別だろうと思うわけですね。おそらく八月三日の「偉大な」を取ったことは、十全大会で党規約の中から毛沢東個人に関する一切の規定を全部取りはずしたことが、もうほぼ固まった時期だと思ふんですね。そうしますとこれは単に、党規約の上から毛沢東の項目を削っただけですむかというんですね。これが公然たる毛沢東批判の道を開いたも同然なんです。ここにおいて江青、姚文元グループの危機感はさらに高まった。

そこでいまの孔子批判、秦の始皇帝擁護は、言わば江青グループが林彪批判の深化に対する自分たちの防衛策として、打ち出した

の関連での始皇帝像の修正の必要性、これだと思ひます。そして第二には秦は御承知のように戦国の七雄の一小国に過ぎなかつた。しかし始皇帝が出て戦国時代を統一し短命に終わったけれども、中国において初めて中央集権的な国家をつくつたわけです。一方、林彪事件以来の中国の政治情勢を見ると、どうも軍を含めて群雄割拠、地方分散的な状況がある。そこで中央集権国家をつくつた始皇帝を、民衆にもう一ぺんイメージアップする必要があつた。

もう一つは始皇帝と言へばだれも思い浮かべるのは、万里の長城ですね。つまり当時の北方の異民族、北狄に対して、万里の長城を築いた。一方、現在の中ソ関係を考えますと、最近是中国に対する予防戦争論さえ出ているわけで、全面戦争になる可能性は、私は少ないと思ひけれども、少なくともたてまえとしては、たいへんな反ソキャンペーンをやつて、ソ連の奇襲に備えなければならぬ。対ソ防衛上からも言わば万里の長城をもう一ぺん築く必要がある。

こういうことをまず始皇帝について私は感ずるわけです。

柴田 ほとんどそこところはばくも同じ

なんです。ただ一つばくは、今度の運動の中で孔子批判よりも、秦の始皇帝擁護のほうが、実際は重要な意味を持っているんじゃないかと思ひます。結論的にそこがちょっと違うかもしれないけれども、さらにもう一つ、「五七二工程紀要」は、ばくも林彪ではなく別の人間が書いた、と思ひます。なぜならば毛沢東が秦の始皇帝であるということを書くことは、相当意地の悪いことです。

さらにあの中で「彼（毛沢東）は孔孟の道を行く者で、マルクス・レーニン主義の皮を被り、秦の始皇帝と同じ中国史上最大の封建君主である」と孔孟と秦の始皇帝を一緒にして、毛沢東を批判している。こういう書き方はいま毛沢東自身、あるいはその側近グループにとって、非常に困ることでしょう。またいまあらためて秦の始皇帝擁護を出すくらいなら、この時期に削つてもいい。だからむしろばくは「五七二工程紀要」は、林彪批判の名を借りながら、毛沢東をおとしめている。始皇帝擁護はそういう人間に対する反発つまり、林彪批判の名において、毛沢東に対する崇拜、英雄史観否定を行なつてきた脱文革の過程に対する反発だと思ひます。これが第二にばくのいいたいことです。

第三にばくがいいたいのは、さっき、「二つの路線の対立」ということが話に出ましたけれども、現在それはまだ全面的に顕在化していないということです。

江青・姚文元の危機感

脱文革化の中にはいろんなものがあるわけですが、一番早いのは六九年秋の対外政策の転換ですね。それから「劉少奇なき劉少奇路線」と言われる現実主義的、物質主義的な経済合理性の上のつとつた経済政策、これが二番目です。

三番目は旧幹部の復活、これは文革急進派の脱落と交互していますけれども、リーダーシップにおける脱文革化ですね。

第四番目は教育、文化部門の変質。たとえば試験制度がいつの間にか復活している。

もう一つは、英雄史観の否定のもとに、毛沢東の個人崇拜がどんどん否定されていく。この五つぐらいの過程がずうっと進んできた。

いまこれに対して文革派、急進派が挑戦しようとしているわけですが、どこまでやろうと思つているかは別として、少なくとも今のところばくはわりと限定されているという感

のではない。防衛策というのは一つは毛沢東の個人崇拜を否定した党規約の段階から、さらに毛沢東批判が起こることを阻止するということですね。そのために「五七一工程紀要」で林彪が毛沢東批判に使ったことになっている、秦の始皇帝を擁護する。

もう一つは、旧幹部がどんどん復活していく。これはまさに江青、姚文元グループが最もいじめた連中ですね。いわゆる実権派旧幹部と知識人ですね。これがただ単に地位を復活しただけならいい。ところがもつと林彪批判が深化し、脱文革化が進むにつれて、彼らが名譽を回復したらどうするんです。そうすると江青、姚文元が逆に摘発される。肉体的に殺されるかどうかは別として、抹殺されかねない。ここでおそらく『光明日報』の復活した幹部は自己批判して復活したのであって、彼らの名譽回復をはかったわけではないという歯どめをやったんじゃないだろうか。三つ目は教育革命が変質し、試験制度がまた復活してくることに對して、学生の造反有理という形で、歯どめをしようとした。

こういう骨格を見ると、これは文化部門に限定されていて、しかも孔子批判よりも秦の始皇帝擁護論のほうに重点がある江青、姚文

元たちの自己防衛的な小運動ではないかと思われまふ。

第二文革というような積極的な攻撃運動ではない。したがってこれが周恩来を目ざした運動だともぼくは思わない。脱文革化の非常に限定された部門に對して反発しているにすぎない。これはこの間「自由」にも書いたような党の中央機関を握ることが行政府や、地方や、軍部を握ることではないという文革後の中国共産党中央の指導性の喪失とも、関連しているわけですね。

中嶋 いまの柴田さんの御意見を伺っていて、大筋として一致しているのは、始皇帝評価は言わば一種の防衛的品格を持つということです。これは、ぼくもそのとおりだと思うんです。しかし何を防衛するのかというところ、明らかに毛沢東の権威ですね。そういうことになる、その延長線上にやはり脱文革を指導した周恩来、ないしは脱文革グループがたちだかっているということには、ならないわけですか。

柴田 周恩来体制のリーダーシップというのは彼が自分のグループをつくったり、自分の考え方だけで指導してきたというよりは、旧幹部、軍人、あるいは人民大衆の要求、国

際環境の変化等々の波に乗ってバランスをとりつつ導くというふうなものですから……。

周恩来は潜在的な非毛沢東主義者

中嶋 そうですよ。ぼくも周恩来路線はまさにそういうものだと思っんです。周恩来個人をあまり表に出すことを避けた、言わば実務派行政官僚、脱文革派と非林彪系の軍人および旧実権派の三者のコアリション体制＝連合体制がいわゆる周恩来体制だと見るわけですね。ですからその点は意見の違ひはないんですけれども、ぼくは周恩来は本来、言わば潜在的な非毛沢東主義者だと思っわけです。

柴田 そのことばはいいですね。

中嶋 ですから毛沢東がやってきたことに對して、常に功罪をよく知り、これからの開かれた中国に對しては、言わば毛沢東型の革命路線を修正していかなければいけないという、たいへんな使命感、言ってみれば国家的な使命感に立脚していると思っんです。周恩来のビヘービアは常にそういうところにあった。だからそういうコンテクストからしますと、どうも「五七一工程紀要」を流布させたことは、しかもそこで秦の始皇帝を毛沢東になぞらえたことを削りなかつたことは、ある

意味で非常に深謀遠慮が働いていたんじゃないか。

党規約だって全文を見ますと、大体みんな毛沢東語録をつなげたものなんです。しかも江青夫人へ当てた手紙、毛沢東が地方を巡察したときの談話紀要の中のことは、そういう言わば非公式談話における毛沢東語録が出て

いる。これはいずれかの日にあるいは毛沢東の責任を追及することに使うこともできる。

つまりそこまで毛沢東は党を家父長化した、という形で……。そういうことを含めて、非常に遠大な戦略が秘められているんじゃないかと、ぼくは考えるわけです。

柴田 そりゃ、六六年に江青に与えた手紙を見ても、あれを見たら……。

中嶋 あれが流されたら毛沢東は困るわけですよ。

柴田 そうですよ。

中嶋 それがいま流されているんですよ。

柴田 大体六六年から林彪があやしいと思っていた男が、六九年の九全大会でなぜ後継者に指名したか。この自己矛盾を見よという手本みたいなものでしょう。だからそこはものすごい底意地悪いというか、そこをぼくは

読み取らなきゃならんと思うんですけどね。

中嶋 こういう点では柴田さんの意見とそんなに不一致はないんです。しかし今回の闘争を柴田さんのおっしゃるような防衛的運動と見ていいかどうかということになると、ぼくは、もっと事は大きいんじゃないかという気がします。

もちろんこれがはたして第二文革というところまでいき、文革グループの勝利に帰するかというと、これはぼくは非常に否定的なんですけれども、ただ現状において判断すると、そういう批判の潮流としてはかなり激しいものがある。文化部門に限定されていると柴田さんはおっしゃったけれども、意外に文化部門は中国の政治のガンで、上部構造の間



題はいつも重視されるし、文革そのものがまさに文化部門を中心として起こってきた、それが大きな政治闘争となったことからすると、かなり意味するところは大きいんじゃないかという気がするんです。

孔子批判は周恩来批判？

そこで孔子批判に話をすめますと私はむしろこれは周恩来に対する批判じゃないかと見ているわけです。それは幾つか根拠があるんですけれども、その中の一つは、楊崇國論文の中に出てくる、そして『人民日報』や『北京週報』も資料として解説しているんですけれども、少正卯殺害問題です。孔子の論敵である少正卯を孔子が殺したんだということとを、かなりスペースをさいて事新たにいい出している。つまり殺害という非常にどぎついことばを何回も使って、少正卯を殺したのとはんでもない大間違いであった、少正卯はどちらかというと、法家の思想的な先駆者であって、当時の革命的な潮流を代表していたにもかかわらず、孔子が殺してしまったといっている。

この問題は実はぼくの仮説からすると、王洪文報告の中で、「路線にかかわること、大

局にかかわることであれば、真の共産党員は公に尽くす心をいだいて、免職をおそれず、党からの除名をおそれず、入獄をおそれず、殺害をおそれず、離婚をおそれず、敢然と潮流にさからわなければならぬ。」という風に反潮流をあおるようなことをいい、しかも免職、除名、入獄、殺害、離婚というような非常に刺激的なことを、なぜ使ったのかという点にも関連するんです。しかも、この王洪文報告は、毛沢東思想ということばを消しながら、その消した理由を鄧小平が八全大会でやったように、詳しく論理的に説明してもないし、非常にさらっと流して、いかにも不本意な形でむしろ当時の潮流、つまり周恩来路線なり、脱文革化のとうとうたる潮流に、さからおうとするような雰囲気さえ見られるわけですね。そうするとさきほどあげた部分はむしろ林彪の殺害、あるいは死んだ林彪を哀悼しているのではないかとさえ見るわけです。

つまり殺された小正卯（＝林彪）のほうが、ほんとは正しかったんだということになる含みではないか、それが第一点。

第二点は『人民日報』の十一月二十五日、『紅旗』十一月号の石論論文の中にこういう

ことばがある。「秦王朝が樹立された後、多数の儒生は政府機関と文化部門にまぎれ込んだ。このようにして儒家の勢力は秦王朝内部で急速にふくれ上がった」そして始皇帝が当時焚書坑儒をやったにもかかわらず、秦王朝の内部に、（つまり毛沢東体制の内部に）言わば多くの反動的な儒生がまぎれ込んでいて、ということと言っている。一方、いま中国では周恩来がまさに政府行政部門にぎり、そして必ずしも十分に確立されてない文化部門においても、われわれも予想はしていたんですけれども、かつての文化部長、作家の茅盾（ぼうしん）がつい最近復活しましたね。このあたりにも何か照応関係が感じられる。

第三点は、やはり孔子批判の中で反孔子のポーズをとりながら、一たび政權の座につくと、あるいは統治の側に立つと、むしろ孔子思想を振り回して支配をかためたということばが出てくる。これもかなり周恩来批判をそこに大きく含んでいるのではないかと気がします。

第四点は今日の周恩来はかなり中国の民衆に、広範に支持されている。香港あたりにのがれてくる難民でさえも、周恩来の悪口はあまりいわない。そういう周恩来の大衆的な基

盤を考えると、石論論文の中にもう一つ衝撃的なことばがあるんですよ。「奴隸主貴族たちはさらに世論をつくり上げ郡県制を継続することになった」。つまり、世論に対して問題を提起していることですね。つまり反革命的な（脱文革的な）世論を造成しているんだといっている。こういうことを考えてみますと、やはり問題はかなり根深いんじゃないかという気がするんですけど、いかがでしょう。（笑）

柴田 ぼくの潮流ということばの解釈は、六九年の九全大会以後の潮流、つまり林彪を主流とした潮流をさすのではないかといいことです。だから潮流に対しても、党からの除名でも何でもおそれずに反潮流せよということば、ぼくは林彪をやったことを賞賛しているんじゃないかという解釈なんです。それに十全大会の中で使われた反潮流ということばが、政治報告をしている周恩来に向けていたと考えていいかどうか……。それは非常に疑問ですね。

中嶋 そうそう、だから王洪文を文革派として位置づけるかどうか、ということにもよるんですけれども、ぼくはどうも王洪文は毛沢東が認知した。そして非常に無傷な経歴を

もつ言わばかえ玉であって、張春橋、姚文元、江青のグループの代表ではないかという気がしているんですけどね。

柴田 その評価と結びついてますね。

中嶋 結びついてくるわけです。

骨ぬきにされた文革派

柴田 ぼくはそのところは王洪文、張春橋と、江青、姚文元は違うと見るわけです。十全大会の人事でも王洪文と張春橋の地位が前よりも上がっているのに対して、メンツこそ失なわないで政治局委員として横すべりして行くけど、実質的には十月一日の国慶節へのあらわれ方から見ても、江青と姚文元の二人の地位低下はものすごいと思うんです。そこにまさにあの二人の危機感があるのではないのでしょうか。

そうしますと王洪文の報告もおそらくこれは周恩來の目を通して出されていると思うし、反潮流が即、脱文革化路線の象徴である周恩來に向けられているかどうか。これはむしろ林彪という合法化された後継者、そして合法化された潮流に対して、ほんとにこれは悪いと思ったら、何もおそれずにやった造反有理を賞賛しているというふうに、ぼくは受

け取るんですけどね。

中嶋 十全大会において確かに江青、及び姚文元の地位の低下は、そのとおりなんですけれども、全体的に見ると言わば文革派と言われる連中は、必ずしも政治局などの中で、全面的な凋落でもないような気がしますね。だから周恩來路線なり、周恩來体制が非常に大きな意味を持って、有効に機能している。

特に外交政策、経済政策はそのとおりですね。にもかかわらず周恩來の基盤は非常に不安定な基盤の上に乗っているのではないかと。

もしも周恩來の基盤が非常に安定的なものであれば、おそらく人事の面でももっと國務院レベルの連中が、党中央にはいったかもしれない。だから周恩來の言わば非毛沢東化へ

の構想が遠大であるだけに、まだ非常に危険な橋を渡っている、と思うのです。

柴田 ぼくもいまの中国共産党の持つ指導力、指導性が弱いことはわかるし、おそらく周恩來とても許世友や、陳錫聯のああいいう地方軍司令官の意志を無視しては動けないと思いますし、まさにその力を借りて文革派に対応していると思うんです。周恩來が自分の派だけですべてをコントロールしてるとは、ぼくは全然思わない。しかし明らかに文革派は党中央機関に特に文化部門に封じ込められている。そして実際の政治の運営は行政府と、中央軍司令官によって動いている。

こういうリーダーシップのあり方を見ますと、周恩來に対する対抗勢力は、毛沢東が文革直前に林彪の軍隊を借り、紅衛兵を煽動して実権派を攻撃しようとした力はあるけど、持っている、もうすでに骨抜きにされている、だから六六年、ないし六七年、いわゆる文革派として一種の結束を保っていた連中にしても、あの過程で陳伯達がやられ、林彪がやられ、文革英雄がほとんどやられた中で、あくまでも江青、姚文元と一緒に行動をともしようと考えるほど、中国人はそんなに非政治的だろうかと思うのです。



まさにそういう文革派解体こそ、周恩来が再び劉少奇や林彪の二の舞を見ないために、非常に政略的にとってきた措置ではないか、そういう意味で、張春橋や王洪文は江青、姚文元とちょっと違うし全体の力関係でも周恩来が一〇〇％とは言わないけれども、八五％から九〇％、あるいは九五％まで押してるという感じがするんですよ。ここに江青や姚文元の危機感が非常に強まって、もう文革の論理の復権とかいうような堂々たるものではなくて、林彪が最後に、軍事優位の体制の中で早く国会を開き、憲法を通して自分を国家主席にして、周恩来をコントロールできる国家主席の地位につきたいというふうに、なりふりかまわずやったあの非常になまぐさい人間的な行動を、江青や姚文元に感じるんですよ。

中嶋 ただ、ぼくもまだいろいろわからないところがあるんですけども、それにしても、ちょっと今度のキャンペーンが大がかりでありすぎる。今回の『人民日報』や『紅旗』が何回も紙面をさいている。最近では写真を見ますと、地方の人民公社あたりでも孔子批判のキャンペーンがやられている。しかも柴田さんもおっしゃるように、これは林彪批判

ではなく、もつと意味するところがあると思えば……。ぼくも江青、姚文元がそれほど大きな力を持っているとは思いませんけれども、そのへんはどうですか。

「造反有理」を信じる人がいるか

柴田 ただ、そのキャンペーンは『人民日報』をざあっと見ていますと、ちょうど文革直前に『紅旗』と『人民日報』が対立するか、明らかにだれをさしているかわかるような批判がおこなわれるとか、ああいう緊迫感はずな。数から見ても、ぼくは『人民日報』を見ていて、そう多くはないという感じがするんですよ。

たとえば八月で目立ったのは楊崇國論文、九月では例の孔子は全民教育家だったか。

中嶋 確かに『人民日報』はそんなに多くないですね。

柴田 九月はさらに焚書坑儒を弁ず。十月は石俞論文と、翁俊雄論文、十一月も二、三本ですね。だからものすごい勢いで周恩来攻撃が大キャンペーンされているという印象はまだ受けられない。

中嶋 それはそうです。しかし文革の時期にも、まさか劉少奇が、と思っていた。です

からいまは言わば……。

柴田 前哨戦……。

中嶋 そうそう、だから……。

柴田 しかし問題は毛沢東が坑儒じゃなく、坑周をやれるだけの組織力を持っているかというところに、結局行くんですからね。ぼくはまさにその組織力をざあっと切ったのが、脱文革化過程だったんじゃないかと思う。また造反有理をもし毛沢東の側近派、江青、姚文元たちが言っても、それを信じる人がいるかということです。文革英雄として造反有理の先頭に立った連中は、いま地方に流され、消された。いま造反有理についてくる人は、ぼくはほとんどいないと思いますよ。

中嶋 ぼくもその点は全くそうだと思います。文革はまったくといっていいほど成果を残さなかったのですから、再びああいう形を行なうことは不可能ですね。ただ、さっきの話に戻ると、『人民日報』は少ないけど『紅旗』がかなり多いですね。

柴田 もちろん、ぼくもいま出ている現象を分析して、言っているんであって、これが経済政策批判、外交政策批判にまで及んできたら、やはり視点を変えなきゃならないと思

うんですよ。この先これが周恩来に絶対に向かないとはだれもまだ断言できない。

中嶋 いまの中国はある意味では一たびはずみのついた歯車を必死に回さざるを得ないですね。日中関係にもそれがはつきりあらわれている。これを転換することはもうできない。文革は挫折し、これからの中国は閉ざされた中国から、開かれた中国への大きな転換期にある。だから言わば時は周恩来に味方していると思うんですよ。

しかしながらかなりシリアスな批判があり得ることもまた当然です。周恩来がやっていることを見ますと、だれが見ても中国は変わったんじゃないかと思えますよね。その変わり方に対する説明がないことは、中国の民衆のだれもが感じている。そうしますと日本の田中政権と非常に親密にすることや、ニクソンを迎えることについても、非常に素朴な疑問が出るわけですね。

そういうものに対する一つのもやもやとしたものを代表するような意味で、今回の孔子批判はいままで論理からすれば、意外に説得力を持つわけですね。そこにいまの中国の一種のジレンマもあるし、矛盾もあると思うんですけれども。

柴田 周恩来が劉少奇に近いぐらいまで、脱文革化を進めようとしているのかどうか、まだわかりません。しかしともかくいまの反発は脱文革化のなだらけ現象に対する歯どめであることは確かです。なだらけ現象化というのは具体的に第一に旧幹部が復活して、江青、姚文元に報復すること。それから第二に毛沢東の個人崇拜を否定しただけでなくて、スターリン批判のような毛沢東批判が行なわれること。

特に文化大革命の中で後継者をつくったのは、単に毛沢東思想を絶対化し、毛沢東の個人崇拜を確立しただけでは、毛沢東が死んだ時点でいつスターリン批判のような毛沢東批判が行なわれるかもしれないという危機意識からではないかと思われます。

林彪は実権を持っていたか

本誌 柴田先生の、党機構は形骸化して、実質的な権限が国務院を中心とした政府機構に移りつつあるというさきほどのお説をもう少し読者のために説明して下さい。それは少なくとも従来の「社会主義体制」とっては根本的な……。

柴田 それはたとえば林彪は当時実権を持

っていたのか、持っていなかったのかという論争につながると思うんですよ。彼は後継者であり、党副主席であり、No.2であった。それが即実権を持っていたならば、彼は国家主席なんか要求しなかったと思うんですよ。そこにすなわち国家行政と党の分離があるし、それはまさに党の高い地位を持つことは、即実権を持っているのではないということの証明でしょう。だから文革以後の党の指導力、指導性の低下は、林彪事件に非常にはつきりあらわれている。それが急速に修正されて、改正されて、いまや十全大会で党は非常に大きな力を持った。行政部門も、軍も、地方も、全部コントロールできるようになったとはばくは思わないんで、まだ再建過程にあると思うんですよ。

そうしますと党中央機関の組織部とか、宣伝部門を、確かに姚文元や、江青系が持っているかもしれない。しかしそれは即内外政策を決定する実質的中心にいないというのではないところに、いまの中国共産党と国家行政との乖離があらわれているんじゃないかと思えますね。これはいまの中国の政治、リーダーシップの構造論になるので、中嶋さんの意見もちょっと聞きたいんですけどね。非常に中心問題だと思いますね。

中嶋 全国人民代表大会が一九七三年も開かれなかったとするならば、あれほど予告された全人代がなぜ開かれなかったのか。非常に素朴なことなんですけど……。やはりそれだけの体制にないということだと思っただけ。

だから、柴田さんの今の説に対して、私は半分賛成で、半分は異論がある。確かに現在の中国において外交政策なり、経済政策を決定するオーソライズされた場はない。常に刃がこぼれるような政治闘争を繰り返していますから。そうすると國務院のような実際にそこで実務を常に行っている、国家の事務局みたいなもの、あるいは官僚体制のようなものが言わば内政、外交の具体的な政策を動かすようになる。その点では私は柴田さんの説に賛成なんです。

文化部門は党内闘争の結節点

反面、中国共産党のこれまでのプロセスを見てみますと、文化部門、イデオロギー部門、あるいは知識人問題というところが、常に大きな党内闘争の結節点であって、そこでがたがたといきますと、幾ら外交関係で対外接触がはなやかに行なわれていても、それが意外にもろかったということは、いままでもよ

くありましたね。文革のときもそうでしたね。だからそのへんをそうはつきり言っているかどうか、ちょっと疑問なんですけどね。

柴田 もちろんばくも國務院が非常に大きな力を持って、何でもやっちゃっているというのではありません。しかし党機構自体、書記局はないし、宣伝部はないし、それから組織部、統一戦線部もない。あるのかもしれないけれども、部長がいない。部長の名前が出ているのは対外連絡部だけである。またしょっちゅう中央委員会、政治局委員会を開いているわけでもない。非常に少数の人間によって、これが毛沢東の意志だという形で決定されている。そういう状況じゃないかと思うんですがね。

また全国人民代表大会が開かないだけではなくて、中国共産党全国代表大会も、はっきり言ってかなりインテキなものだと思うんですよ。九全大会は、党組織は再建されていなくてもかわらず、革命委員会の代表が集まって開いた。十全大会は九全路線の継承だと言いつつ、実際は九全大会で決定したことを否定している。それから例の大躍進が失敗したときの政策転換にしても、三面紅旗を高く掲げてやる。そういう中国的特質という

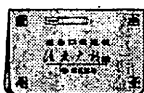
か、体質というか、そういうものを見ると、もちろん国家権力の最高機関である党大会、全国人民代表大会を、われわれは重視するのですが、一方、一体中国においてそういうものが、どれぐらいの死活的重要性を持っているかということについては、非常に疑問があるんです。

中嶋 確かにその点ではまさにこれは社会主義を考える

大問題ですね。つまり本来社会主義というワケ組みで中国を考えるならば、まさにそういう社会主義体制における組織的な、制度的な保証が必要なんですけれども、そうではなくて、中国というワケ組みの中でい

新しい通帳 住友の総合口座

お手持ちの普通預金通帳を便利な
(総合口座)にお切り換えください



ごんにちば
住友銀行

まの社会主義を考えることになり、中国はそういうものを必要としない。

その点はいくつもの点にすぎません。十全体制は一種の過渡的な集団指導型を表に出しましたね。にもかかわらず、そういう集団指導型の体制が中国社会にフィットするかどうかがあるわけですね。歴史的、伝統的に独裁者が出てくるわけでしょう。

つまりどこかでほんとはそういう中国的な体質を、社会主義の体質の中に合理化していなければいけなかったんですね。その歯どめが全然なくなっている中国は、今後ともこういう激動をずうっと繰り返すわけですね。その点で周恩来が、林彪事件みたいなものが十回、二十回、三十回も起こるんだと言ったことは、一つの真理だったわけですね。

ただ私が一番心配することは、はたして中国がそんなことをやっていて、これからの国際社会に一体耐えていられるかどうかという点ですね。

積極的に評価したい十全大会

柴田 周恩来体制とか、周恩来の時代というの、まさにそういう認識、このままではだめだという認識が出たところに、最たる特

徴がある。かつて五六年の八全大会で、集団指導性でいなくなっちゃいかなんことをきめた。しかしその直後百花斉放にあらわれた反革命への危機意識から毛沢東は階級闘争優先主義にはいった。それ以来の中国は、まさに毛沢東の個人崇拜と、毛沢東的な理想主義的革命の実験によってずうっと困難が続いてきた。その頂点が文革だった。

そしてその文革の論理が、十全大会でやはりばくは実質的に否定されていると思う。独裁者、絶対者の存在を否定した。後継者を選ばなかった。集団指導性を打ち出した。こういうことによって、少なくともぼくはいままでのようなNo.2をめぐる、とどまるところを知らない権力闘争に、一つの歯どめができたと思うんです。そういう意味ではぼくは十全大会を文革や、九全大会よりも積極的に評価したいということなんですけどね。

中嶋 しかし、周恩来はなぜ自分の持っている構想をもっと前面に押し出さないのであるかという問題があるでしょう。

ぼくは周恩来のあの政治報告を読んだとき非常に周恩来無理してるな、と思いました。どこかに無理がある。例えばいまの当面の矛盾は階級闘争ではなくて、経済つまり生産力と

生産関係にあるということと言ったという点で、陳伯達や林彪を非難していますね。しかし周恩来こそ、いまの中国の問題は階級闘争ではなく、経済の再建にあることをだれよりも知っているはずなんです。そして実際政策の面でも周恩来はそうしているわけですね。対外的にも、対内的にも。同時に周恩来政治報告に林彪の九全大会の報告は本物ではなくて、言わば不本意ながらやったということはある。それは非常にうがった読み方をすると、周恩来もいま非常に不本意ながら政治報告を読んでいるんだということを訴えているんじゃないかという気がしてね。

柴田 ぼくは全然違うんですね。というのはそこに非常に中国的であると同時に、周恩来的な性格を感じるんですよ。これだけ脱文革化が進められてくれば、劉少奇が復活してもいいんじゃないかというのは、日本人の発想でしょう。ところが劉少奇は復活しないけれども文革は挫折していくというのが、ぼくは中国的な行き方だろうと思うし、あそこで周恩来が、劉少奇のことを言わなかったのがまさしく周恩来的なのであつて……。

「開かれた中国」への生みの苦しみ

中嶋 中国において政治制度は、非常に不安定な基盤の上に乗ってきた。ずっと一貫してそうなんです。その場合に意外に知識人問題、あるいは上部構造の問題が、重要だというのがこれまでのプロセスだった。たとえば劉少奇の中間地帯論とか、対外政策そのものに對するまともな全面的な批判は、特になかったですね。あとでいろいろ言われましたけれども、こじつけにしか過ぎなかった。林彪についてもソ連と結んだとか、いろいろと言われていますけれども、やはり、上部構造つまり林彪の共産黨員としての修養に對する考え方が批判された。これに中国にとって伝統的に大きな意味を持ってきた孔子、あるいはもう一つの大きなシンボルである始皇帝を

取り出したことを考え合わせますと、私はむしろ今回の批判の中には、周恩來の米中接近、日中復交等々を含めたすべての脱文革、言わばまさに周恩來路線に對する広範な批判が含まれているのではないかと思うんですが。しかしながらそれが周恩來をもっとはつきり名指すような批判にまで行くかどうかについてはかなり懐疑的にならざるを得ない。行くとすれば中国は大混乱におちいるんじゃないかという気がします。一方、毛沢東は従来から『毛沢東選集』のなかにも孔子や孟子をしばしば引用していますし、文革期にも孔子の道を一概に否定すべきではないと、紅衛兵たちをたしなめています。『毛沢東語録』は「現代の論語」でもあるだけに、こうした一

連の文脈からして孔子批判は毛沢東批判だとしたら、また問題は大きいですね。

いずれにしてもいまの中国は非常に流動的で、不確定要素が多いし、不安定であって「毛沢東以後」への大きな転換期におけるジレンマの中にあり、ある意味では新しい時代の開かれた中国の生みの苦しみの中にあるかもしれないという気がするんですけどね。

柴田 ぼくは、これは長い目で見るとやはり文革が生み出した後遺症であろう、脱文革化の中の部分的ゆれであろう、と。こういうふうに見えるんじゃないかと思いますね。

本誌 それではこのへんで、どうもありがとうございました。



読売新聞社

ルネサンス

山崎功著

◎定価1,200円

半世紀の歳月をイタリア研究にささげてきた著者が深い学識と鋭い洞察をもって解明するルネサンスの全貌

〈内容〉

ルネサンスとはなにか／最初の民主主義革命／市民社会／人文主義／婦人の地位と社会生活／宗教の問題／法王と君主／傭兵と戦術、ほか

読売新聞社